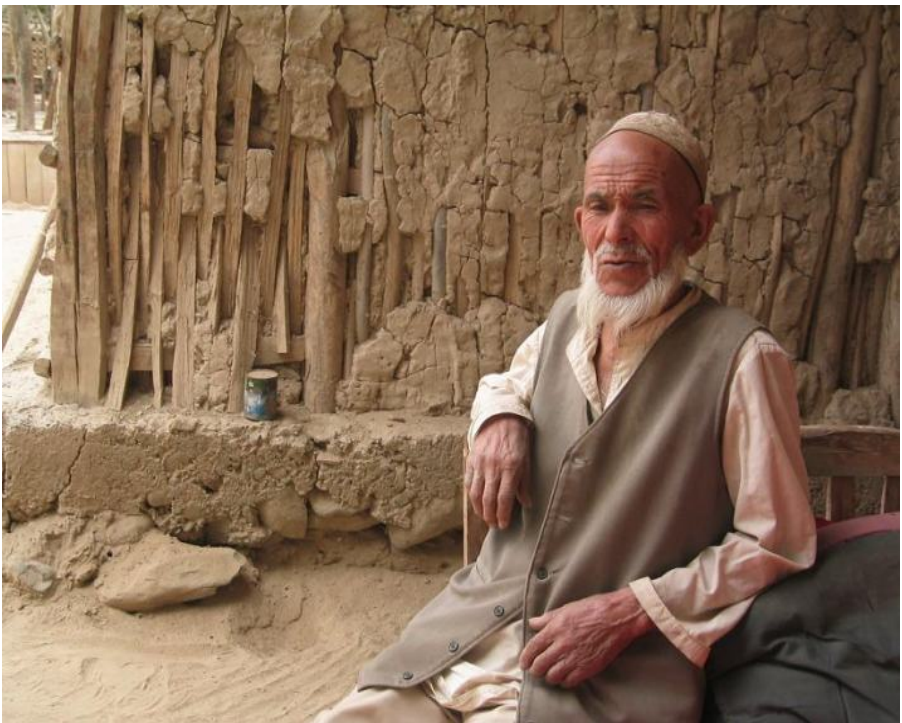


はじめに

― 民族アイデンティティの変容 ―

新疆ウイグル自治区の首都ウルムチと日本では時差は三時間ある。ウルムチは中国が成立してから急速に発達した都市で、今は一〇〇万を越えている。この自治区の名が示すように。この地の主要な民族はウイグル人である。八〇〇万の人口をもつが、ウルムチでは漢民族が多い。ウルムチにはいわゆる「シルクロード」の面影は薄い。

ウイグル人の生活を見ようとするなら、彼ら自身が言うように民族の故郷である南新疆に行かなければならない。主な調査地であったホータンはそのひとつの都市である。飛行機でウルムチから天山山脈をこえ、タクラマカン砂漠を横断して、西域南道のおアシス都市であるホータンに一時半で着く。西域南道はヨーロッパと中国を結ぶシルクロードとして有名であり、法顕や玄奘、さらにマルコポーロもここを通っていった。その頃はこの地は仏教であったろうが、一〇世紀あたりからイスラムが西から入ってきて、ウイグル人はスンニー派のイスラム教徒となった。



ホータン市は人口十八万で、八割はウイグル人である。南にチベットを隔てる崑崙山脈があり、その万年雪の水で農業などが成立している。雨はほとんど降らないが、水不足にはならない。小麦や綿花、とうもろこし、さらにメロン、スイカ、イチジク、ざくろ、ぶどう、アンズなど豊富な果物が取れる。これらはバザールでも売買される。

ウイグル人の歴史は複雑である。日本列島という一応限定された空間で展開された日本の歴史と違って、多様な民族が混在する広大なユーラシア大陸の中央部での民族移動の歴史の中からウイグル人の歴史が生まれる。古代、タクラマカン砂漠の周辺のオアシス都市の住民はインド・イラン系の言語を話していた。日本にも伝えられた仏典、般若経、阿弥陀経などはこのオアシス都市のひとつクチャで四世紀に生まれた鳩魔羅什（くまらじゅう）によってサンスクリットから中国語に翻訳された。彼はインドから亡命した父をもち、インドに仏教を学びに行っている。



しかし、九世紀にはモンゴル高原を追われた古代ウイグル人がタリム盆地東部に西ウイグル王国を建て、一〇世紀には西からカラハン朝が進出し、「チュルク化」と「イスラム化」が同時に進行する。その後はモンゴル帝国の支配下に入るが、仏教は十六世紀まで存続した。この時代までウイグルという名称は仏教徒と同じであり、イスラム化した住民は自身をムスリムとよび、この地に住む人々の統一した名称はなかった。十八世紀半ばに、清朝に征服され、この地は新疆といわれるようになった。しかし、現地の有力者（ベク）に統治を任せ、大きな変化はなかった。十九世紀の後半、新疆では反乱が続出し、ロシア、英国などの列強が中国侵入をうかがうなかで、新疆省が成立し、同化政策に転じた。これは民族の自覚を促し、一九二二年にウイグルという民族名が採用された。





中華民国時代には内地とは違う政策をとる支配者が次々とかわり、安定した時代は長く続かなかつた。東トルキスタンを名乗るウイグル人の独立国もできたが、一九四九年の中華人民共和国の成立とともに、それに合流した。その後、人民公社、大躍進、文化大革命と苦しい時代が続いた。改革開放政策とともに、経済成長の波がウイグルにも押し寄せ、経済格差など新たな問題を生じさせている。

本書はウイグル文化の広い意味での教育について、その変化する現代的側面と伝統的な側面の二つについて述べている。別の面からは、ライフサイクルにも論じている。人生の通過儀礼の中で、出産、子ども、女性、学校教育、共同体の中のしつけなどを描いている。

ウイグル社会はイスラムであり、中国の一部として社会主義化された。イスラムは「抑圧された女性」、社会主義はその対極に「解放された女性」というステレオタイプの女性のイメージが流布している。ウイグルのイスラムはアラブ世界のイスラムとはかなり違う。また、社会主義も自発的になったものではない。東トルキスタンとして独立を試みた歴史もあり、チベットと同じような複雑な民族問題を抱えたままの、社会主義化であった。

改革開放の市場経済の中で女性の地位は上がったか、ウイグル社会は男女平等といえるかを、内婚率などの変数を使って論じている。また、社会主義の体制の中で必ずしも男女平等が実現したとはいえないことを、歴史をさかのぼって述べている。第7章では、社会主義が終わって、家庭回帰とも言える現象の中で、後退のように見える女性の社会的役割が、むしろ結婚式や、葬式などの中で際立っていて、それがイスラム以前の母神信仰と関係あることを論じている。





ウイグルには他の社会と同じように日常生活や儀礼の中に様々なタブーや禁忌がある。その中に男女の世界を区別することにまつわるタブーが多い。イスラムの影響が強いものも多いが、日本の民間信仰のように太古から伝わる禁忌もある。社会主義の時代から合理的な生活が求められる時代に、「迷信」として省みられないものが大半を占める。このような迷信はあってもなくてもさして日常生活に困らないように見える。だが、些細なところで人の行動や思考を規制している。迷信、禁忌を民俗的知識として暗黙知の概念を使って、人を規制する力を考える。

またウイグルにおける教育は、違う言語を持つ民族を一つの国家の中にいかに統合していくか、世界的に見れば多文化教育、多言語教育の実験的な場であった。これら二つとも本書ではウイグルでの問題であるが、述べてきたように世界に繋がる普遍的な問題でもある。

マッシュラップは祭りや儀式のようなものであるが、むしろ日本語に訳すなら「宴」もしくは「娯楽」であろう。また、伝統的な子供への教育的文化である。ただし、様々な形があり、一概にはいえない。これもイスラム以前からの習慣である。だが、人民公社、文化大革命をへて、次の世代に伝えられることがなく、消滅しようとしていた、それが違う形で、いまの時代に復活しようとしている。マッシュラップはジェンダーの視点からいえば本来は男のイニシエーションでもある。しかし、当然それにも女性が重要な役割を果たす。

ウイグル語と漢語（中国語）について、教育の場における中国政府の言語政策、言語的アイデンティティの危機を論じている。

アイデンティティという言葉は便利な気がして以前から使用しているが、違和感は拭いきれない。アイデンティティは日本語に無理に訳すると「同一性」である。個人のレベルでいえば、生れて亡くなるまで、人格的に同一であること、統合していることが通常であり、その統合性が無くなると「クライシス」だといわれてしまう。だが個人のアイデンティティが、このように、いつでもどこでも同じであらねばならないというのは欧米的な観念である。





アイデンティティは本質的、実体的なものではない。「アイデンティティの概念は統一されたものではなく、断片化され、分割されている。アイデンティティは単数ではなく、様々であり、交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される。アイデンティティはたえず変化・変形のプロセスの中にある。」<sup>(1)</sup>

個人のレベルでもその統一性があやしいのに、これが民族などの集団レベルでのアイデンティティの話になると問題はさらに複雑になる。前に述べたようにウイグルの民族的アイデンティティのような使い方になるとこれはアイデンティティを「文化」といいかえても同じことのように思える。

アイデンティティは「自分は何者か」「あなたは何者か」ということであり、他者との違いを問うものであるが、文化の認識もまず差異である。「ウイグル文化の輪郭」とタイトルをつけ、新疆ウイグル自治区だけでも八〇〇万人もいる大集団のウイグル人を対象にしている。一応ウイグル人は「少数民族」になっているが、何億人もいる漢民族からみるとどのような民族も「少数民族」になってしまう。量的にも大きいのに、前に述べたように複雑な歴史をもっている。東西南北から移動してくる民族の影響をうけて、いまでも例えばトルファンの東新疆と、ホータンの南新疆は同じウイグルでも文化が違うといわれている。



このような歴史的背景を持つ文化を「ウイグル文化」としてくくることはできない。中国政府の民族識別工作によって、身分証明書には「ウイグル族」として識別されている集団がいることは事実である。しかし、その集団が同質的な「ウイグル文化」を持つているとは考えられない。実際、この本で描いているウイグル文化は主に南新疆のホータンで話を聞いた人から集め、その中でまとまりのあるパターンの集積にすぎない。

ただし、別の文化と対置される形で「ウイグル文化」としてのくくりは意味を持つ。対置される文化とはほとんど「漢文化（中国文化）」である。「自動車を運転できる人とできない人は体験や行動において同じではない。それも文化的差異として、職業の機会の差、行動範囲の差などの実践的な違いが出てくる。しかし、われわれはこれを文化の違いとして認識し、差別などの行動には出ることではない。ところが、他民族にまつわる習慣の相違は実効的にはその社会的結果を無視しうるものであっても、一つの集団と別の集団との違いとして表象され、他民族を外在化してしまう。」(2)



ではなぜ民族間の差別や偏見が生まれるのか。「別の種に属すという知識が他民族を区別し、ごく微妙な差異を民族・人種の種差として事後的に知覚させ、指標のとり方で、差別の対象になる。民族は体験される差異によって差別されるのではなく、差異を経験にもたらしめたための民族や国民といったそれ自身は経験できない実定性が先入観として働くときに差別される。

「実定性」とはヘーゲルの言葉で克服されるべき墮落した理念である。民族文化を支える理念として母語、母国語、国語などがあるがそのような統一体を発明するのは、母語によって生きている人々ではなく、言語に関する言説、あるいは民俗学者や言語学者の言説である。いわば、合体幻想にすぎない。(4)

原理的に考えれば幻想かもしれないが、ウイグルという民族名が採用され、教育制度の普及とともに、ウイグル語は標準語化され、「ウイグル族」という民族識別が固定化された。そして中国政府と市場経済の力によって、ウイグル語は使用される場を狭められている。このような状況で漢文化と対置する形で「ウイグル文化」が登場する。

ウイグルには文化に相当する言葉が二つある。マドニヤートとウルパ・アデットである。人類学的に考えれば、前者は「文明」に、後者は「習慣」(人類学で使う文化である)に近い。当然ながら、漢文化とのせめぎあいは、ウイグル医学でも教育の場でも創造していくウイグル・マドニヤートにある。これはアイデンティティとしての文化でもある。

本書はウイグルの様々な問題をウイグルの民族誌、とくにホータン地方の民族誌を背景に論じている。ウイグルをはじめとして中央アジアのトルコ系民族は社会主義の時代もあり、人類学的な調査が難しかった地域である。今でもウイグルは民族対立の原因で、政府側も過敏なところがあり、それほど容易に調査ができるところではない。ウイグルは現地調査の資料が少ない地域でもある。本書は一九九四年から毎夏に行なった調査が基になっている。写真や調査報告はウェブサイトで公表している(5)。これからもウイグルを訪ねて調査は続行するつもりであるが、本書がウイグルに関心がある人にとって一助になることを願っている。

#### 【注】

- (1) スチュアート・ホール、宇波彰監訳、二〇〇一、カルチュラル・アイデンティティの諸問題―誰がアイデンティティを必要とするのか、大村書店、一二頁。

- (2) 酒井直樹、序論―ナシヨナリテイと母(国) 語の政治―、酒井直樹、ブレット・バリー、伊豫谷登士翁編、一九九六、ナシヨナリテイの脱構築、所収、四二頁。
- (3) 同右書、四二頁。
- (4) 同右書、二九―三一頁。
- (5) <http://www7b.biglobe.ne.jp/~fsho2uyghurhotan/>